

二人の女性を天に送って

今年のゴールデンウィークには葬儀が二つ続きました。享年 88 歳の晴代さんと、87 歳の和子さんです。お二人は私が若いころからの教会の友人です。



晴代さんは、洋裁や刺繍のプロでした。若い頃には、SKD（松竹歌劇団）にお友だちが何人もおられました。「あなただって舞台に立って活躍するような美貌の持ち主よ」と言いたいほど、目鼻立ちがくっきりとした綺麗なかたでした。仕事柄、ファッションセンスが鋭く、ボタン一つにもこだわりがありました。素敵な洋服を何枚か作っていただきました。教会の役員も進んで引き受けられ、「いのちの電話」や「日本基督教海外医療協力会」など、ボランティア活動にも取り組まれました。彼女の働きにどんなに目を見張ったことでしょう

和子さんは、若いころから、お母様を手伝って働かれ、弟妹の面倒をよくみて、何事もキチンとされる、しっかり者の長女でした。結婚後は、家庭を大切にされ、家事も丁寧にこなされ、子どもの勉強やおけいこ事などにも熱心で、優しく清楚な感じのお母様でした。ご夫婦そろって洗礼を受けられ、教会の奉仕も真心こめてなされ、婦人会の仕事、会報の作成、日曜学校のキャンプなど、お嬢さんも手伝ってくれて、よく一緒に働いたものでした。私は紬の着物を縫っていただきました。



最近では、エンディング・ノート、終活などという言葉が自然に使われています。意思が伝えられるうちに、自分で準備するようになりました。独身の晴代さんは 80 歳を過ぎたころに、ご自身の葬儀をすべて計画し、依頼すべきところは依頼しておかれまして。一昨年、お宅をお訪ねした時に、一人暮らしを頑張っておられました。彼女トイレには、綺麗なタオルのハンカチが積み重ねられていて、「お使いになったらバスケットに」とあり、彼女のお洒落心が健在なのに感心したものでした。彼女の最後の看取りも、葬儀も彼女の遺言通りに執り行われました。

一方和子さんは 70 歳代で脳出血を発症し、麻痺が残り、介護が必要な状態になりました。彼女には、現在も 100 歳を超えるご長寿の、いまだに趣味で活躍しておられるお母様がいらっしゃいます。お母様と彼女を「一日でも長生きしてほしい」と献身的に支えられる弟さんご家族がいらっしゃいます。弟さんは、脳梗塞を起こし、寝たきりになった和子さんに、延命措置をしてでも生きてほしいと願っておられました。3 月にお見舞いに伺った時、穏やかで透明感のある美しい天使のようなお顔を見せて下さり、私たちの話を聞いてくれました。最期に、主治医は老衰として受け入れるよう、それが看取りだと弟さんに言われたようです。また、長い闘病生活に耐えてこられた彼女を天国に送ることを受け入れたお子さんたちの願いで延命措置は断念されました。

お二人とも本当に素晴らしい人生を生きられたと思います。祝福された死だと思えます。その人に相応しい形が備えられたように思います。私はお二人に大変親切にいただきました。感謝しています。讃美歌の「また会う日まで」を歌いながら天にお送りしました。|